

障がい者を含む老若男女が共に踊る 文化活動プロジェクトを推進

高島氏▶



愛Wishプロジェクト代表
健康運動指導士

高島 康貴 氏 (Mr. Takashima)

Mr. Takashima のステージネームで親しまれている高島康貴氏は、学校や福祉施設でのイベントのダンスの振り付けや指導を長年行ってきた。東日本大震災発災後に、「愛 Wish プロジェクト」を立ち上げ、障がい者を含む老若男女と一緒に踊る舞台をつくり上げる文化活動プロジェクトを推進している。



▲下呂市合併15周年記念イベント「マカニーとエルド2019」

仕事をしながら演劇活動 ダンスの振り付けも担当

高島康貴氏は、高校時代に劇団四季の「ウエストサイド物語」に魅了されて、ダンサーを志した。高校卒業後は東京での役者修業、ニューヨークへのダンス留学を計画したが、諸事情があつて断念。地元岐阜市の「劇団はぐるま」に所属し、会社勤めをしながらのダンスと演劇活動を開始する。

ダンスには自信があつた高島氏だが、劇団に入つて役者仲間の技量と舞台づくりに挑む真摯な姿勢を知り、「てんぐになつて鼻をポッキリ折られた」と言う。厳しい環境は

高島氏の心を奮い立たせ、ダンサーとしての研鑽を積んでいく。ここでも数々の舞台を経験し、ミュージカルにも出演するうちに、舞台でのダンスの振り付けも任されるようになる。

ろう者と健常者が 一緒に踊る舞台を演出

高島氏が、現在のような舞台をつくるきっかけとなつたのは、「岐阜ろう劇団いぶき」との出会いだった。昭

和60年、岐阜で開催される全国聴覚障がい者の大会でダンスを踊りたいと考えた「いぶき」の代表から、振り付けとダンスの指導を頼まれたことがきっかけだった。当時24歳だった高島氏は、大きな舞台で健常者とろう者が一緒に踊るといふ新しい試みにワクワクしたが、耳の聞こえない人たちと一緒に踊ることに不安もあつた。

しかし、稽古が始まると、しっかりとリズム感があることがわかった。音楽が聞こえなくても、横で踊るダンサーの動きを見て合わせたり、太鼓の響きを体で感じたりすることで、一緒に踊ることができるようになる。

さらに、驚くことがあつた。練習に使つていたカセットテープが暑さで伸びたことで音楽のテンポがふだんより少し遅くなつた際には、健常者は気づかなかつたが、一緒に踊っていたろう者はすぐにそれを指摘した。耳が聞こえなくても、健常者の動きを見ていつもと違うと感じたのだ。こうした体験もあり、高島氏はろう者と健常者を区別せず、常に高いレベルを求めてダンスの振り付けを指導してきた。

東日本大震災をきっかけに プロジェクトを開始

その後、高島氏はダンスの指導をする機会は増えていったが、会社の仕事が多忙になり、40歳を過ぎるころは舞台に立たなくなっていた。

そんな高島氏が舞台活動を再開するきっかけになったのが、平成23年3月の東日本大震災だった。仕事の拠点が栃木県にあったこともあり、突然仕事ができなくなった。気持ちに沈み部屋でうずくまっていたとき、劇団はぐるまから舞台を手伝ってほしいと依頼が入った。「動かなくてはダメだ」と考えた高島氏が劇団での活動を再開した矢先に、岐阜ろう劇団いぶきから、設立30周年記念で「はぐるま」と合同公演するミュージカル『人間になりたかった猫』の振りつけとダンス指導を頼まれた。

28年ぶりにろう者と舞台をつくることに元気を取り戻した高島氏は、この活動をライフワークにすることを決意し、12月に「愛 Wish プロジェクト」を立ち上げた。

平成24年に上演された合同公演の舞台は、手話を取り入れて振り

つけ、健常者とうろう者の老若男女が一丸となって踊る迫力あるものになり、観客の喝采を浴びた。

障がい者と踊る 舞台活動をスタート

高島氏はこの公演を契機に、特別支援学校の生徒や知的障がい施設の利用者にプロジェクトへの参加を呼びかけていく。さらに、障がい者の家族や特別支援学校の先生にも参加を促し、一緒に踊る楽しさを体験してもらうことを大きな目的とし



特別支援学校での練習

て活動している。「障がい者やその家族は、健常者と一緒に行くことに対して迷惑をかけると懸念しており、その気持ちを払拭したい」と高島氏は話す。また、健常者は障がい者かわいそうだと思いい、特別扱いするケースが多い。「健常者も障がい者も共に生きるため、みんなで踊ることで相互理解が進むのが、このプロジェクトのすばらしさ」と笑顔を見せる。

「文化芸術を通じた共生社会の実現」をスローガンに掲げる高島氏の活動は少しずつ知られるようになり、中部学院大学、岐阜聾学校、下呂特別支援学校など、さまざまな場所でダンスを指導するようになる。行政とのつながりも深まり、岐阜県や愛知県などの自治体主催のイベントで、義足のダンサーの大前光市氏を含む総勢100名以上のダンサーが踊る大掛かりな舞台を披露するように発展している。

ダンスの指導方針は 楽しさを感じてもらいたいこと

高島氏がダンスを教えるときに最も大切に考えているのが、楽しさを

感じてもらうことだ。大人数で一緒に踊ることが楽しい、舞台上でスポットライトを浴びるのが誇らしい、家族の笑顔がうれしいなど、ふだんは経験できないことを通じて楽しさを感じてほしいと考えている。

特別支援学校にはダウン症、自閉症、発達障がいなど、さまざまな子どもたちがいる。安全のため稽古は健常者とは別に学校内で行い、本番で合わせることが多い。そうしたなかでも、高島氏はなるべく障がい者と健常者が接する機会を増やすように工夫している。「障がい者を怖いと感じ、どう接していいのかわからないと戸惑うのは、身近に障がい者がいないから」と指摘する。健常者の子どもたちは、障がい者と一緒の時間と場所を共有するうちに、特別扱いしなくてよいと学び、自然につきあうようになっていく。

もう一つ、愛 Wish プロジェクトの立ち上げ当初からこだわっているのが、イベント開催や舞台公演を赤字にしないことだ。「プロジェクトは継続が大事、赤字を出しては続かない」と考えた高島氏は、障がい者へのダンス指導は無償で行っているが、学校の

授業の一環として指導ができるような環境づくりや、行政の助成金、民間企業の寄附を得る努力を重ねるとともに、無償で貸してくれる稽古場を探し、ここまで赤字を出さずに事業継続している。

一緒に生きていけると感じてほしい

高島氏は、大きな舞台を行うたびに、岐阜県内のろう学校、特別支援学校に公演のチラシを送り、舞台に無料招待している。障がいの有無にかかわらず一緒に踊る舞台を見て、障がいのある子どもたちに「自分たちにも自己表現の場がある」「健常者と一緒に生きることができると感じてほしい」と考えている。じつと座っていられる子どもばかりではない、客席からときに奇声上がることもあるが、それも折り込み済みだ。

ふだんとは見違えるように生き生きと踊る姿を見て、家族や先生たちから「こんな姿は見たことがない」と感激されることもあるが、舞台はすべてがうまくいくとはかぎらない。稽古では上手にできていた子どもが、本番にかぎってまったく動かなくなる

ことや、舞台に寝ころがる子どもが出てきたりもする。高島氏はそれも失敗とは考えない。稽古のときに楽しいと思つた体験、キラキラと輝いた思い出があれば、それで成功、舞台に参加して一体感を味わつただけで意味があるにとらえている。

新型コロナウイルス感染症にめげず舞台活動を継続

高島氏が健康運動指導士の資格

取得を考えたのは、愛Wishプロジェクトを立ち上げた平成23年だった。当時、医師と話す機会があり、一定の知識をもつて意見交換するにはこの資格が必要と感じ、同年に健康運動実践指導者を、2年後に健康運動指導士の資格を取得した。その後、特別支援学校等の授業を受け持つようになり、健康運動指導士の資格があることが学校関係者の信頼につながっていると感じている。プロジェクト立ち上げから9年を経て、新型コロナウイルス感染症の拡大という大きな試練が訪れた。公演はすべて中

止になり、特別支援学校や福祉施設等での練習も中止。稽古場も借りられなくなった。すべての活動ができなくなったことで、血圧が上がつてしまい体調も崩した。しかし、東日本大震災で同じような経験をした高島氏は、めげずに活動を開始した。リモートによる稽古を始め、リモートで作品をつくり、感染対策を施した舞台をつくり上げて、コロナ禍を乗り越えた。

舞台活動を広げより多くの連携をめざす

障がいのある子どもたちは、健常者との稽古を通して体も心も元気になっていく。共に踊る健常者も、舞台を見る観客も、障がい者に対する見方や考えが変わっていく。そうした変化を見てきた高島氏は、「両者が混じり合うこと、共に生きることが大事」と実感している。そのため、今後の目標の一つとして、舞台活動を全国に広げたいと考えている。「地域でワークショップを企画・開催して、障がい者と地域の人たちが共演する舞台を実施できるので、やつてみたいと思つたら声をかけてほしい」と話す。

2つ目の目標は、障がい者施設だけでなく、老人ホームやグループホームなど、さまざまな高齢者施設と連携を深めることだ。舞台に出ることで健常者も元気になる。みんなと一緒に稽古する場、舞台を上演する場をできるだけ増やし、行政ともさらに連携を深めて、「ダンスを通して共生社会の実現」のために力を注ぎたいと考えている。



みんなが共に踊るダンスに、音楽や映像が加わって一つの舞台に